

京都大学リーディング大学院 PWS の実践の場としての 日本モンキーセンター

松沢哲郎、山極壽一、伊谷原一

京都大学

はじめに

日本モンキーセンター（英文名称 Japan Monkey Centre, 略称 JMC）が、2014年4月1日に、公益財団法人として生まれ変わった。理事長として元京大総長の尾池和夫をいただき、松沢哲郎、山極壽一、伊谷原一という京大教授3人が、在職のまま兼任することで、協力して運営に携わるシステムである（図1）。この3人は、いずれも京都大学リーディング大学院『霊長類学・ワイルドライフサイエンス』（英文名称：Kyoto University Leading Graduate Program in Primatology and Wildlife Science, 略称 PWS）の創設者でもある。

PWS という大学院教育プログラムの実践の場として、日本モンキーセンターを位置付けた。本稿では、そこに到る経緯と、現状と、今後の展望について解説したい。なお、典拠には番号を付して、巻末に参考文献を掲げる。

『ヒマラヤ学誌』でなぜ日本モンキーセンターを取り上げるのか、と不審に思われる方もあるだろう。兩者をつなぐキーワードは〈フィールドワーク〉である。『ヒマラヤ学誌』は、現在の編集長の松林公蔵をはじめ、松沢・河合明宣・瀬戸嗣郎・古川彰の京大山岳部出身者5名が初代の編集委員となり、学問としての「ヒマラヤ学」の創設を目指して刊行を開始した。刊行母体として、京都大学ヒマラヤ研究会（略称 ASH）を1988年に創設した。このASHが、最初のヒマラヤ学誌0号（1989年）と1号（1990年）とそれ以降の刊行の母体となって今に続いている。この四半世紀を振り返ると、「フィールド医学（field medicine）」というような、フィールドワークを基礎にした新しい学問の揺籃の場所を本誌が提供してきた。

日本の野山にすむサル。その社会についての野外研究を始めたのは、今西錦司（1902-1992、図2）

とその弟子の伊谷純一郎、川村俊蔵、河合雅雄ら、当時の京大生たちだった^{1,2)}。本稿で取り上げるのは、フィールドワークを基礎にした霊長類学の発展と、そこから生まれた新しい学問としての「ワイルドライフサイエンス」の実践だといえるだろう。

今西は、桑原武夫（1904-1988）、西堀栄三郎（1903-1989）らの同級生と語らって、三高旅行部から京都大学学士山岳会（略称 AACK、現会長は松林公蔵）へと続く山登りの伝統を築いたといえる。梅棹忠夫、川喜田二郎、中尾佐助、吉良竜夫ら、フィールドワークを基礎とした学問をする俊秀がそこから育った。戦後は、登山活動は京大山岳部（略称 KUAC、現在の部長は幸島司郎）に収斂しつつ、一方で探検部を生み出し、京都大学らしいフィールドワークの伝統を創った。京都大学が今なお探検部と呼ばれる由縁である。なお、京大山岳部を中心とした山登りそのものの過去40年の歴史については別項に譲る³⁾。

われわれ著者3人の世代は、今西錦司らとちょうど半世紀の違いがある。青春時代といえる頃、今西らは70歳を迎えていた。直接、彼らと親しくことばを交わした最後の世代だといえるだろう。本年10月1日から京大総長になった山極は、学生時代にはスキー部に所属していた。スキーをしながら野生ニホンザル研究に興味をもち、ゴリラと霊長類学・人類学にたどりついた。松沢は山岳部だった。伊谷原一は、純一郎の長男であり、野山をかけまわって育った。山に連なる系譜と、フィールドワークを基礎とする霊長類学・ワイルドライフサイエンスは不可分の一体だといえるだろう。

京都大学には、今西・桑原・西堀らから連綿として一群のフィールドワーカーがいる。京都大学リーディング大学院 PWS の発足も、その実践の

場所としての公益財団法人日本モンキーセンター JMC の再生も、すべて一連の同根の共通した志に由来している。それは「フィールドワーク」という学問の手法と、新たな学問の創出に共通の特徴がある。リーディング大学院 PWS では、人間を含めた自然のまるごと全体を対象にした「ワイルドライフサイエンス」と呼べる新たな学問の振興と実践をしようとしている。学問は、座学であってはならない。書を捨てて野山に出る。自分で歩いて、見て、聞いて、肌で感じて、自らの頭で考えたことを学問にする。そして野山に身を置いて学んだことを、新しい学問にしたてあげる。学問は実践してこそ意味がある。

京都大学リーディング大学院 PWS は 2013 年 10 月 1 日の発足以来、ちょうど 1 年が経過したところだ。まだ『ワイルドライフサイエンス』を標榜する自前のメディアをもっていない。一方で、リーディング大学院 PWS の主要な海外の調査拠点のひとつがブータンだということもあって、前号のヒマラヤ学誌 15 号から、PWS がその発行母体のひとつとなってきた。つまり、PWS の実践の場としての発信メディアが『ヒマラヤ学誌』である⁴⁾。そうした縁を背景として、本稿では、日本モンキーセンターの過去・現在・未来を述べるとともに、本誌が担う今後の役割をより明確に示したい。

日本モンキーセンターの設立経緯

日本モンキーセンター JMC は、1956 年 10 月 17 日に設立された。愛知県犬山市に拠点をおき、2013 年度末まで文部科学省が所轄する財団法人だった。

愛知県で徳川美術館に次いで 2 番目に古い登録博物館である。1957 年から、英文の学術誌 *Primates* を刊行している (図 3)。博物館なので、学芸員をおいて霊長類に関する展示をおこない、その一環として附属サル類動物園を保有している。日本に動物園は約 90 施設あるが、大半が県や市の運営だ。その行政のしくみのなかで、公立動物園の多くは公園等を所轄する土木局等のもとにあり、教育関係の局には属さない。したがって「博物館登録されている動物園」は、日本モンキーセンターひとつしかない。

日本の霊長類学は、1948 年 12 月 5 日に始まった。

学問の出発点を特定できる珍しい例だろう。今西錦司 (当時 42 歳の京大無給講師) が、2 人の学部学生 (川村俊蔵と伊谷純一郎) を伴って、宮崎県の幸島に野生のサルを見に行った日である。幸島のサルは、現地の冠地藤市らの努力によって、すでに戦前から地元で天然記念物に指定されていた。都井岬の半野生ウマの観察中にサルに遭遇し研究の着想を得たという。サルの社会を知ることが人間の社会を知ることになると今西らは考えた⁵⁾。

京大の今西ら霊長類研究グループと東大の時実利彦ら実験動物研究グループが中心になり、渋沢敬三ら財界とくに名古屋鉄道株式会社 (名鉄) の支援を得て、財団法人 JMC を作った。当時の名鉄は、「中興の祖」と呼ばれる土川元夫 (1903-1974) の時代である。日本モンキーセンターは、今を先取りする産学の連携事業のはしりだといえる。じつは、関西で始まった阪急—大阪—宝塚がそのモデルになっている。鉄道会社が大都市の郊外に施設を作り、日帰りの行楽とともに宅地化を進める。中部地方にあてはめたのが名鉄—名古屋—犬山である。犬山には国宝の犬山城がある。日本に 400 余りの城があるが、国宝は 4 つしかない。犬山、松本、彦根、姫路だ。その犬山城から木曾川に沿って上流に JMC を設立し 1957 年、犬山野猿公苑を開園、屋久島から連れてきたヤクニホンザルを放飼展示したのがはじまり。1962 年には現在の場所に世界サル類動物園と遊園地を併設した施設を開園している。博物館明治村 (1965 年)、野外民族博物館リトルワールド (1983 年) などができたのはその後になる。

今西と土川は京大の同窓生である。ほぼ同学年だ。まだ霊長類学という学問が日本で誕生して 10 余年しかたっていない。今西らは、そこでまず民間の支援をもとに、一般の人々の関心を高めることで学問の礎を築いた。今西の育てた伊谷や河合雅雄といった人材は、いずれも名鉄職員ないし日本モンキーセンター職員としてそのキャリアを踏み出した。

1964 年 5 月、日本学術会議が内閣に対し、「霊長類研究所 (仮称) の設立について」勧告した。当時の日本学術会議は、後に 1965 年度ノーベル物理学賞を受賞する朝永振一郎 (1906-1979) が会長で、副会長が桑原だった。勧告を受け取る側

の総理大臣は池田勇人（1899-1965）だった。いずれも京大の出身である。勧告から3年後の1967年に京都大学霊長類研究所が発足した。

霊長研の発足に伴って、財団法人日本モンキーセンターに依拠していた研究者たちが京都大学に移った。逆にいえば、日本モンキーセンターの登録博物館としての研究機能が低下し、学術部門の人員の削減と研究活動の低下につながった。また、その移行期の軋轢があって、霊長類研究所と日本モンキーセンターは南北に隣接する組織でありながら、その関係は必ずしも良好なものではなかった、というきらいがある（図4）。

公益財団法人への道

動物園と遊園地をあわせて、その入場者数は1987年には約100万人だった。その後は年々減少して近年は50万人台である。名鉄ないしその関連会社が運営の実質的な主体である。財団法人日本モンキーセンターの歴代所長を京大の退職者が務めるといって見える関与を通じて、京大の研究者が支援してきた。民間が運営する一帯の営業呼称は、今回の公益財団法人化以前は「日本モンキーパーク」だった。南北にのびる主要道路をはさんで、西にジェットコースターや観覧車に乗れる遊園地があり、東にサルに特化した動物園があった。

日本モンキーパークの入場者数の減少で動物園の経営はむずかしくなっていた。一方で、「公益法人の認定等に関する法律」（公益法人認定法）の施行（2006年）により、財団法人そのものは2013年度をもって解散しかない。進路の選択肢は大きく3つだった。①公益財団法人となって公益を重視する、②解散して民間の経営となり収益を重視する、③その中間として一般財団法人化して従来の公益事業の一部を残す。

公益法人認定法施行時、著者らの世代すなわち松沢と山極は、財団法人日本モンキーセンターの理事だった。所長は、京大アジア・アフリカ地域研究研究科長を務めた人類学者の市川光雄である。先人と同様に、定年退職して所長になった。市川は、松沢にとってみれば山岳部の4年先輩にあたる。市川の前の所長は西田利貞である。西田も、京大理学研究科人類進化論教室の教授を定年退職して所長になった。西田は、山極にとってみ

れば同じ教室の上司だった。つまり、西田・市川らからバトンを受け継ぐ世代に著者らになっていたときに、名鉄のほうから、公益法人認定法に基づく将来設計が求められたことになる。

日本モンキーセンターの果たすべき役割を改めて考えてみた。この地球には人間を除いて約300種類の霊長類がいる。中南米、アフリカ、インド・東南アジアの熱帯とその周辺にくらしている。そのすべてが絶滅危惧種である。彼らの野生での暮らしは人間の活動によって危機に瀕している。森林伐採による生息地の破壊、密猟しての売買や害獣としての捕殺、そして人間に近いための病気の感染だ。動物園は「自然への窓」である。JMCが保有する68種985個体（2014年4月1日現在）のサルたちは、世界一の種数であり、日本が世界に誇る貴重な財産だ。サルを眼の前で見ることで、実際の体験を通じて、人間とは何かを知り、われわれが共に生きる地球について思いをめぐらせる。

次に、大学の使命は何だろうか、と自問するところから始めた。学校教育法の第9章に「大学の使命が書かれている。かんたんにいうと、学園を通じて社会に貢献することだ。大学には、研究・教育・実践という3つの側面がある。そこで、日本モンキーセンターを、「霊長類学という学問の研究・教育の成果を実践する場所」とし位置付けた。経営ないし財政ないし運営という点からみると、最も責任が重く、最も困難が予想される公益財団法人への道を選んだ。

公益財団法人日本モンキーセンターの定款づくりから始めた⁶⁾。その目的を以下のように明記した。「霊長類等に関する調査研究を基盤に、その保護と生息地の保全を行い、社会教育・普及活動や図書等の刊行、標本等の資試料の収集、さらには福祉に配慮した動物園の設置及び経営等を通じて、学術・教育・文化の発展及び地球社会の調和ある共存に資することを目的とする」。

ここに掲げた「地球社会の調和ある共存」は、京都大学そのものが憲章として掲げている理念である。したがって、2008年に創設された京都大学野生動物研究センター（Wildlife Research Center, WRC）も、2011年に発足したWRC傘下の熊本サンクチュアリ（Kumamoto Sanctuary, KS）も、2013年に発足した霊長類学・ワイルドライ

フサイエンス・リーディング大学院 (Leading graduate program in Primatology and Wildlife Science, PWS) も、「地球社会の調和ある共存」という同じ理念を掲げている。つまり、同じ精神に発した兄弟姉妹の関係にあるとあってよい。

公益財団法人は、以下に述べる 10 の事業をおこなうこととした。

- ① 霊長類に関する総合的な調査研究
- ② 保護及びその生息地の保全に関わる活動
- ③ 環境教育並びに社会普及活動
- ④ 図書及び学術誌の刊行
- ⑤ 標本等の資料の収集・管理及び展示
- ⑥ 福祉に配慮した動物園の設置及び経営
- ⑦ 適切な飼育・展示並びにこれに関する技術的指導及び協力
- ⑧ 研究会、講演会の開催
- ⑨ 展示、保全、環境教育及び社会普及活動に関わる人材の育成
- ⑩ その他この法人の目的を達成するために必要な事業である。その公益事業の推進に資するため、次の 3 つの収益事業を行うこととした。
 - ① 動物園における物品並びに飲食物販事業
 - ② 所有する土地・建物の賃貸事業
 - ③ その他動物園等に関連する収益事業

以上の事業を、本邦及び海外において行うものとした。

以下において、公益財団法人日本モンキーセンターの掲げる事業の顔となる、①博物館としての日本モンキーセンター、並びに②動物園としての日本モンキーセンターの 2 つについて現状を解説し、さらには将来展望を述べる。

公益財団法人になって何が変わったか

法人としての目的が明確になった。財団法人日本モンキーセンターの定款・寄附行為は、今から半世紀前の 1956 年の設立当時のものを切り貼りしたものだった。設立当初は、アフリカの野生大型類人猿の調査隊を日本モンキーセンターが実際に組織していた。ニホンザルの実験動物としての供給も重要な事業だった。しかし京都大学に人類進化論講座ができ、霊長類研究所ができて、研究の拠点が他所に移る過程で、霊長類の調査研究がないがしろになりがちだった。そこで、新公益財団法人の事業の 1 丁目 1 番地として、新たに「霊

長類の総合的な調査研究」を掲げた。そして研究を基礎にした、保全と環境教育を実践する場所と位置付けた。基礎となる研究・教育があって、「登録博物館であり動物園である日本モンキーセンター」という実践の場所としての法人の姿を明確にした。

日本モンキーパークという遊園地と、動物園を担う日本モンキーセンターが切り分けられた。2014 年 4 月の公益財団法人化以前は、一般の人々にとって、日本モンキーパーク (略称、モンパ) という場所しかなかった。入園料おとな 1600 円 子ども 1000 円を払うと、ジェットコースターに乗れて、観覧車に乗れて、催事場のキャラクターショーを観ることができて、さらに類人猿やサルたちにも会える場所である。はるか昔を知る人々は、草創期の「日本モンキーセンター」を知っているが、現役世代は「日本モンキーパーク」しか知らない。遊園地と動物園の一体化した、名鉄の経営する娯楽施設である。そのなかに、じつは財団法人日本モンキーセンターが寓居していた。しかし公益財団法人化後は、市道をはさんで東西に分断した。西側はあいかわらず名鉄の関連企業の経営する遊園地である。東側は公益財団法人日本モンキーセンターが経営する世界サル類動物園である。サル類を観ることだけに特化した (図 5)。チンパンジーや、ゴリラや、リスザルや、ワオキツネザルや、その他のサル類を観て彼らの姿や振る舞いを観たい人たちが来る。「サルを知ること、ヒトを知ること」という標語や、「動物園は自然への窓」という標語にぴったりの入園者になった。

入園料が格段に安くなった。公益財団法人化後の入園料は、おとな (高校生以上) 600 円、子ども (小中学生) 400 円、幼児 (3 歳以上の未就学児) 300 円、3 歳未満は無料である。この入園料は、他の公立の動物園と比較して、だいたい等価になっている。これまでの遊園地の部分がない。ただし、遊園地と動物園は架橋され連絡ゲートを設けているので、それぞれの入園料を払ってたやすく行き来はできるしくみだ。

休園日ができた。これまでは年中無休に近い形態で営業されていた。公益財団法人化を契機に、他の博物館と同等に、また飼育されていつも人目に晒されているサル類にも配慮して、週休 2 日に



JAPAN MONKEY CENTRE

図1 公益財団法人日本モンキーセンターのロゴ



図2 今西錦司、アフリカの野生チンパンジー調査地ガボゴ岬にて。1962年。

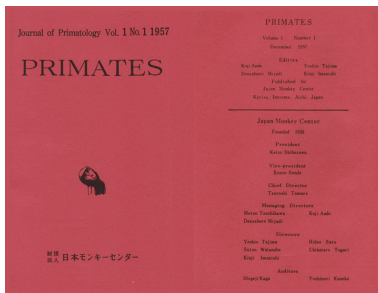


図3 学術誌 Primates の第1巻第1号、1957年刊行の表紙。



図4 霊長類研究所と日本モンキーセンターの航空写真。両者は地続きになっている。



図5 日本モンキーセンター附属世界サル類動物園の園内マップ。



図6 ビジターセンター講堂でのキュレーター（博士学芸員）による説明。



図7 ワオキツネザルの展示。

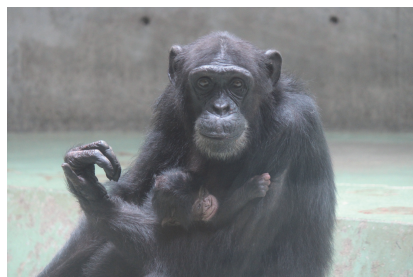


図8 チンパンジー母子マルコとマモル（2014年7月25日生）。14年ぶりの赤ちゃんの誕生。

した。毎週火曜日と水曜日を、基本的に休園とする。ただし繁忙期の8月と10月は火曜日のみを休園とした。逆に、厳寒の2月は、平日がすべて休園日となり、土日祝日のみ開園する。休みの日ができたので、飼育されるサル類の福祉を向上させるための取組、いわゆる環境エンリッチメントをおこなうゆとりができた。

動物園の設置・経営は、公益財団法人としての事業の6番目である。日本モンキーセンターすなわち動物園、ではない。霊長類に関する調査研究こそがだじだ。職員の「生息地研修」を重要な柱にした。幸い、リーディング大学院の実践の場所という位置づけがあるので、野生動物研究センターに付属する、幸島で野生ニホンザルをみる、屋久島で野生のサルとシカと世界自然遺産の森をみる、熊本サンクチュアリでチンパンジーとボノボをみる、そうした試みが始まった。また、今夏初めてタンザニアにチンパンジー飼育担当者を2名派遣して、チンパンジーを初めとする野生動物の生態に触れてもらった。

博物館としての日本モンキーセンターの活動

公益財団法人としての日本モンキーセンターは、「図書及び学術誌の刊行」事業として、霊長類学の英文国際誌「PRIMATES プリマーテス」を刊行している。1957年の創刊号だけ日本語だが、2号以降は英語で出版されている。今西ら、日本の霊長類学の黎明期を創った人々が、この雑誌を媒体として研究成果を英語で世界に向けて発信してきた。直近のIF(インパクトファクター)は1.329で決して高いとは言えない。しかし、霊長類学の分野で現在も続く世界最古の英文学術誌である。国際霊長類学雑誌 (*International Journal of Primatology*) と、アメリカ霊長類学雑誌 (*American Journal of Primatology*) と、ヨーロッパ霊長類学連合の雑誌 (*Folia Primatologica*) と、4者でしのぎを削っている。編集長は、河合一杉山幸丸—西田—山極と引き継いで、2014年10月から松沢になった。

2002年から、学術誌の発行元は、世界規模の出版社であるシュプリンガー社に移行した。日本霊長類学会の準機関誌としてその協力を得ている。日本モンキーセンターが主体となった発行で、

現在、28人の国内外の編集委員 (Associate Editor) と、50余名の編集助言委員 (Advisory Board Member) がいて、編集事務局を引き続き日本モンキーセンターが担っている。

公益財団法人としての拠点として、主たる事務所を愛知県犬山市に置いている。一般の人々にとって日本モンキーセンターは動物園だ。しかし、動物園を併設した唯一の博物館であることの意義は、実際にサル類をみてもらいながらおこなう環境教育だろう。最近もっとも力を入れているのは、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、さらには企業などの団体を誘致しておこなう環境教育である (図6)。

本年で59回目を迎える「プリマーテス研究会」を主宰している。日本霊長類学会が30年前の1985年にできたが、それまでプリマーテス研究会が霊長類学の唯一の研究発表の場だった。継続こそが力である。内容を変えつつ、この伝統を守らねばならない。

「京大モンキーキャンパス」という名称で、6回連続の有料の講義を開いている。本年度の講師は、山極、松沢、伊谷原一、に加えて、幸島司郎、湯本貴和、阿形清和の、リーディング大学院のHQの6名が務めた。一般参加者(受講生)は約100名である。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・東京フォーラム」も今年度から始めた。リーディング大学院PWSのアウトリーチ活動の場を東京にも広げている。霊長類研究所が長年主宰してきた東京公開講座の後継事業である。2014年度は、湯本(霊長研)、平田聡(野生動物)、赤見理恵(モンキーセンター)の3名、すなわちリーディング大学院の3拠点からそれぞれ代表者を出して、一般に話題提供した。約150名の一般参加があった。

同じ東京でのアウトリーチとして、「丸の内キッズジャンボリー」に協賛参加した。8月のお盆休みの時期に、東京近郊の10数万人もの子どもたちが参加する取り組みだ。2014年度が初めての参加になるが、リーディング大学院とモンキーセンターが協力して、フィールドワークの楽しさを伝える試みをした。

霊長類研究所との共同のアウトリーチ活動も、2014年8月から始まった。「京大モンキー日曜サロン」である。いわばサイエンスカフェ風の気楽

な取り組みである。講演会というよりは、もっと聴衆との距離を短くしたい。霊長類研究所の教員だけでなく、ポスドクや、大学院生が、自発的に手をあげて、講演者になる。また講義形式だけでなく、双眼鏡を使って実際にサルを見るなどの取り組みも始めている。

霊長類研究所との動物福祉に関する交流会として「動物園学セミナー」を始めた。

またモンキーセンター独自のうちの勉強会として、「研究セミナー」を開始した。初回の講師として、幸島観察所の鈴木崇文、高橋明子の両氏

を迎えた。こうした催しのために、セミナーハウス「白帝」を整備した。

こうした博物館としての日本モンキーセンターの業務をつかさどるものとして、公益財団法人化を契機に博物館長という職を新設した。初代の博物館長は、山極壽一である。なお10月1日から山極は京大総長になったが、博物館長の職を兼職することが認められた。引き続き、博物館としての日本モンキーセンターのかじ取りをするとともに、対外的なアピールの役を担う。

組織図

平成26年4月1日現在の公益財団法人日本モンキーセンターの組織図は以下に示すとおりである。

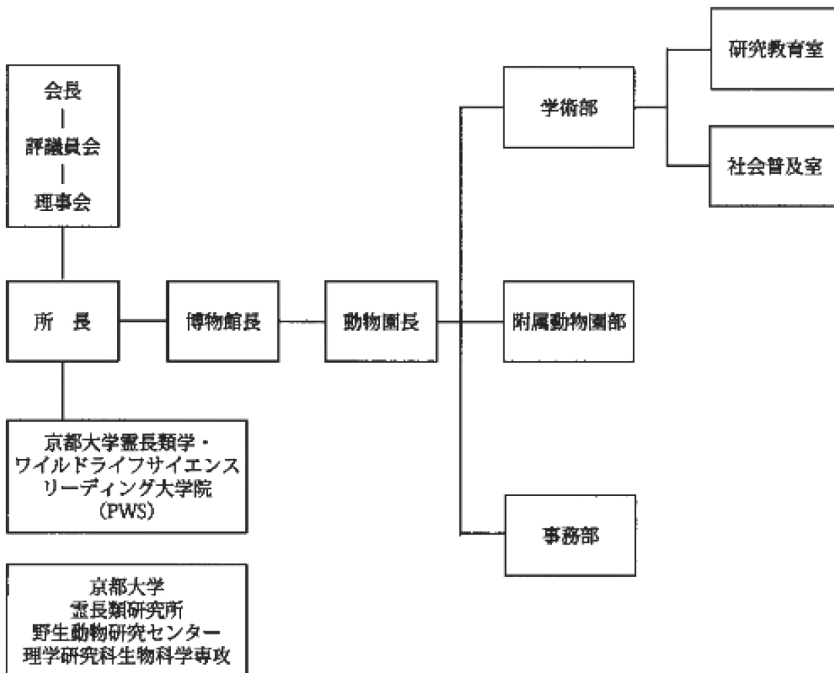


図9 公益財団法人日本モンキーセンターの組織図

動物園としての日本モンキーセンターの活動

公益財団法人日本モンキーセンター附属世界サル類動物園、というのが正式名称である。日本に約90の動物園があるが、博物館でもある動物園は日本モンキーセンターだけである。また、世界的にみて、霊長類だけに特化した動物園も極めて珍しい。飼育している霊長類の種数は、現在(2014年12月1日現在)、67種である。これは種の数という視点で、おそらく世界で最大のコレクションだといえる。

博物館と称するには学芸員が常駐する体制が必須である。これまで学芸員とリサーチフェロウと呼び分けてきたが、公益財団法人化を契機に、欧米で定着している呼称としての「キュレーター (curator)」を正式な職名にした。日本語訳を「博士学芸員」と称する。現在5名のキュレーターがいる。高野智、赤見理恵、大橋岳、新宅勇太、綿貫宏史朗である。実際に京大理学博士を保有するもの2名、京大博士課程単位取得退学1名、東大修士の卒業で修士号を保有するもの1名、6年間の獣医師課程を修了し資格を有しつつ動物福祉研究実践に携わるもの1名である。

2014年12月1日現在で、飼育に専従する職員等が約20名、獣医師が2名、事務に専従する職員が3名となっている。総勢約30名のスタッフを束ね、こうした博物館としての日本モンキーセンターの業務をつかさどるものとして、公益財団法人化を契機に、所長・博物館長のもとに、動物園長という職を新設した(図9)。公益財団法人化後の初代の動物園長は、伊谷原一である。京大野生動物研究センター教授のまま、兼職である。

動物園であり、博物館である、という特徴を生かして、先述したように環境教育に力点を置いている。博士学芸員が培ってきた連携のきずながあって、幼稚園から大学まで、各階層の団体を受け入れて、霊長類学の研究成果に基づいた解説をおこなっている。出前授業等もある。

施設の老朽化等が激しい。したがって、世界の他の動物園と比較して、とくに飼育において優れていると胸をはれるようなものは少ない。しかし、ポリビアのリスザルの展示や、マダガスカルウォキツネザルの展示(図7)や、東南アジアのシャーマン(フクロテナガザル)の展示など、生態に配

慮した飼育と展示も散見される。チンパンジーには14年ぶりに赤ちゃんが生まれた(図8)。いろいろな意味で、これからに期待していただきたい。

大型類人猿に関する情報ネットワーク(GAIN)や、大型類人猿のくらしを野外でも飼育下でもよりよいものにする集い(SAGA)などについて、今後は日本モンキーセンターが主要な推進力のひとつとなると期待されている。そうした保全と福祉の活動の実践を通じて、多様なサル類のくらしの底上げをはかっていくべきだろう。

「自然への窓」:日本モンキーセンターの将来展望

日本モンキーセンターJMCは「自然への窓」でありたい。博物館としても、動物園としても、実感をもって人々に観ていただくサル類を通じて、その背後にある彼らが暮らす自然そのものへの憧憬を人々の心の中に育みたい。

そのためには、JMCの職員みな自然そのものの姿を実際に知っている必要がある。公益財団法人となった最初の全体集会でたずねると、大橋岳以外、約30名の職員のだれ一人として幸島を見たことがないという。そこで、まず「生息地研修」から始めている。3泊4日で幸島に野生のサルを見に行ってもらった。

幸島は岸から200mほど沖合の無人島だ。京大の職員らが、1948年から数えて67年目になる長期継続観察をしている。世界で最も長い野生動物の観察基地のひとつだ。2群れ合計90頭(2014年4月1日現在)のサルがいて、先祖を8世代もさかのぼれるサルの子孫が記録されている。

屋久島にも京大の施設がある。10月にはPWSハウス屋久島が竣工した。研究者に解放された無料の宿泊施設である。屋久島では、サル以外にもシカやウミガメなど多くの野生動物を観ることが出来る。熊本サンクチュアリでは、日本でそこにはかないないボノボ(チンパンジーの同属別種)を観ることが出来る。さらには、ボルネオやアフリカに調査基地がありアマゾンにも計画中だ。そうした大学の施設を利用し、JMC職員には実体験を通じて、各自の職務を遂行するモチベーションを高めてもらいたい。

京大リーディング大学院の事業で、「霊長類学・ワイルドライフサイエンス」を1年前から開始し

た⁷⁾。その主要な実践の場がJMCである。将来、彼ら大学院生の中から、博士の学位をもった学芸員や飼育員が次々とあらわれ、専門的な知識と体験を活かして、動物園・水族館・博物館で働く日を夢見ている。

最後に、われわれ著者からの切なる願いとして、一般の方々からの力強い支援をお願いしたい。「モンキー友の会」にぜひ加入していただきたい。いわゆるサポーターの制度である。友の会の会員証は、動物園への年間パスポートでもある。代金3000円。駐車場は無料になる。これを足掛かりに「モンキー法友の会」も本年度中には発足予定だ。そうした草の根の人々の広範で持続する理解と支援が、公益財団法人日本モンキーセンターという新事業の成否の鍵だと思う。ぜひ友の会の会員証を持って犬山に足を運んでいただきたい。HPは以下の通りである。

和文が www.j-monkey.jp

英文が <http://www.japanmonkeycentre.org/>

謝辞

本稿は、岩波書店の月刊科学雑誌「科学」に、『公益財団法人日本モンキーセンター：「自然への窓」としての動物園』と題して掲載した論文、著者は松沢哲郎・山極寿一・伊谷原一（いずれも京都大学）、に、大幅に加筆改定して研究論文としたものである。今西の写真の出典は、京都大学霊長類研究所・伊谷純一郎アーカイブス。日本モンキーセンターのロゴは、幸島の野生ニホンザルの親子とイモ洗いをイメージしたもので、斎藤亜矢の作品。図としてもちいた写真の提供は、大橋岳、赤見理恵ら日本モンキーセンター職員各位の協力を得た。正確を期して木村動物園長補佐には原稿を読んでいただいた。本研究は、日本学術振興会の支援（リーディング大学院プログラム、U04）を受けている。以上、記して感謝したい。

参考文献

- 1) 伊谷純一郎 (1999) 日本の霊長類学の半世紀。「科学」, 69, 285.
- 2) 河合雅雄・吉良竜夫・斎藤清明・谷田一三・松沢哲郎 (2001) 今西錦司：フィールドワークと初登頂の精神。「エコソフィア」, 8号.

- 3) 松沢哲郎 (2014) 遠征と遭難の日々を振り返るーヤルンカン遠征40周年。「ヒマラヤ学誌」, 15号, 13-22.
- 4) 松沢哲郎 (2014) 一国アウトリーチ：霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院の発足。「ヒマラヤ学誌」, 15号, 93-99.
- 5) 河合雅雄・山極寿一・松沢哲郎 (2003) ニホンザルのイモ洗い発見から50年。「エコソフィア」, 12号.
- 6) 公益財団法人日本モンキーセンター (2014) 定款 http://www.j-monkey.jp/about_us/pdf/memorandum.pdf.
- 7) 霊長類学ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院のHP <http://www.wildlife-science.org/>.

Summary

Japan Monkey Centre: A Place for the Social Outreach of Kyoto University Leading Graduate Program in Primatology and Wildlife Science

Tetsuro Matsuzawa, Juichi Yamagiwa, Gen'ichi Idani

Primate Research Institute, Kyoto University

Japan Monkey Centre

This article aims to introduce the new endeavor of Japan Monkey Centre that was reformed in April 1st 2014. The discipline of Primatology started in Japan on December 5th, 1948. The late Kinji Imanishi (1902-1992) and his two students, from Kyoto University, went to Koshima Island to observe wild Japanese monkeys. By studying the social behavior of this monkey they aimed to understand the evolutionary origins of human society. Most people may not realize that there are no species of monkeys or apes native to North America or Europe. Among G7 member state countries, Japan is unique. Japan has an indigenous species of monkey, called the Japanese or snow monkey, benefiting the study of nonhuman primates here. Primatology is the scientific study of all primates, including humans. In order to understand ourselves as humans, it is essential to study our closest living relatives; people are keen to discover more about apes, monkeys, and prosimians such as lemurs. Thanks to the pioneering efforts of Kyoto University scholars, primatology in Japan began uniquely through fieldwork on the native wild monkeys. Japanese primatologists worked together to help create the Japan Monkey Centre (JMC). It was founded on October 17th, 1956. The JMC aims to promote research, education, conservation, welfare, and communication to the public regarding nonhuman primates. JMC became a 'Public Interest Incorporated Foundation' from April 2014. The JMC is also a registered museum. Since 1957 JMC has produced the journal, "*Primates*", now the oldest Primatology journal written in English. "*Primates*" is a leading journal in the discipline, published by Springer in collaboration with Primate Society Japan (PSJ). The JMC also runs a unique zoo, specializing in nonhuman primates, with over 1000 individuals representing 67 different species. Through observing nonhuman primates we can develop a better appreciation of our place within nature, a keener desire to understand the evolutionary origins of human society and behavior. Kyoto University has 5 leading graduate programs supported by Japan Society for the Promotion of Science (JSPS). One of them is the only-one type program called "Primatology and Wildlife Science", PWS in short. The JMC and PWS have the shared goal of promoting scientific research and education on wild animals, and contribute to the peaceful coexistence of living organisms on planet earth. The JMC is a place for the social outreach for the leading graduate program PWS.